

## ◇ 談話会要旨 ◇

### ヨーロッパロシアを見て来た話

式 正 英

1976年8月、国際地理学会議がモスクワで開催された機会に、3週間ほどではあったが、この巨大な社会主義の国を見ることが出来たのは、幸いであった。モスクワ大学に象徴される建築様式は、ネオバビロニア式摩天楼とも言われ、スターリン時代の盛威を示しているが、モスクワ市内に同じ形で、アパートなど機能の異なるものが、7つもあるのには驚かされた。建築年代は終戦直後であり、日本が敗戦に打ちひしがれていたことを思い出すと、優勝劣敗をまざまざと見せつけられる思いであった。

モスクワ大学の32階建ての尖塔の基部の第24階は自然地理博物館、25～28階は地質鉱物博物館になっている。自然地理博物館の展示は、ユニークで羨ましい程である。ソ連の広大な国土が、コーカサス、ウクライナと言っ 具合に、数十の自然地理区に区分され、1地域1コマごとに、地形、地質、土壌、植生が、サンプルと共に系統的に図解し説明されている。ソ連の大学は、「地理」が学部として地学諸分科を包含して、そのリーダーシップをとっている。このように「地理」が重視されているのは、茫莫とした大地の広がりをも基本的な理解することなしには、文化の発展を望むことはできなかったロシアの自然の酷しさが、背景にあるとも見られよう。

フィンランドに接するカレリア自治共和国の主都はペトロザボーツクである。そのアカデミー支部にも、立派に整備された博物館があり、館員達は真面目に暖かく応待してくれた。エキスカージョンにカレリアを選んだのは、1972年に滞在したスウェーデンと対比して、フェノスカンジヤ氷床のつくった地形の東側を見ておきたいことであった。ラドガ湖、オネガ湖を初め大小の湖盆は、氷床底部の削磨作用が選択侵食して出来た地形であり、ゆるやかな起伏は円磨された岩盤がむき出しの所が多く、氷河堆積物は余り目立つ程はないのが、特徴のようであった。

オネガ湖北端のキジ島には、例のロシア正教独特のキューボラを持つ教会があった。小型ながら22のキューボラが集って一つの屋根となり、木端葺きなのも珍しい。200年ほど前に侵入して来たスウェーデン軍を撃破した記念に建てられたと言う。住民の多くは目鼻立ちからも判るようにフィン系であり、又、垣根は丸太を斜めに立てかけた形式で、北欧諸国に共通である。北欧の先住民の文化圏の上に、ロシア文化が後から蔽いかぶさった形が、文化景観の特色から歴然としているのが面白い。

帝政ロシア時代の首都ペテルスブルグ、今のレニングラードは、バルト海に臨むネヴァ川河口の三角州上に立地する。北緯60°にあり、白夜の都市としては世界最大で人口330万、広島や松江のような軟弱地盤の上にあり、橋が500以上もある水の都でもある。建物はすべて深いパイルの基礎の上に建てられており、建設の難工事で数千の労働者が命を落している。ロシアがヨーロッパに開く窓、直接、海に面する港を一つでもと、執念を燃やしてつくっただけに、凄絶なほどに美しい都会

である。バロック式の建造物がみられ、全体にヨーロッパの香りが高い。郊外のプーシュキンのエカテリーナ宮やペトロボレッツやパブロフスクの宮殿など、戦争で破壊されたものも今は金泥も鮮やかに復原されている。歴史的遺産を大切に保存する精神と共産主義の教義が矛盾なく並列している現実は、とかく短絡的精神構造の日本人の目には、複雑異様なものに映る。

モスクワ東郊のザゴルスクには、ロシア正教の総本山があり、神学校がある。全国各地から巡礼団が雲の如くに押し寄せ、燈明をかまげ、聖水を飲み、敬虔な祈りを捧げる。神父の司る宗教儀式もカトリック教会と同じに厳肅であり、ミサの青年は教会の創立者の名を挙げて讃える。他の場所で見た教会はすべて過去のものであり博物館であつたりしたが、こゝだけは宗教は依然として息づき、根絶やすことの出来ない事実を示していた。(1978, 1, 21)

## 装身具による地域区分の試み

### — ネパールの場合 —

向 後 紀代美

ネパールの工業を研究テーマにしていた私が、装身具に興味をもつようになったのは、4年前(1975年)北西インドのスリナガルの裏街で奇妙な石を見たことがきっかけであった。チベット人青年が首にさげていたその小さな石は、黒地に白で円や幾何学模様が入っており、長さ3センチ、直径1.5センチほどの紡錘形をしていた。チベット人はこの丸い模様を「目」と考え、この「目」が病気や災いから身を護ってくれると信じているという話だった。このチベット版「お守り」は1個1万円以上もする。1世帯の月平均所得が約3000円というインドで、1万円といえば大金である。日本に持ち帰っても、おそらく買う人はいないと思われるそんな石に、なぜチベット人はそれほどの価値をおくのだろうか。私はその石をスリナガルだけでなく、ラダック地方でも、またインド北東部のダーズリンヤカリンボン、そしてネパール各地でチベット系住民のみが身につけているのを見た。その石(チベット語でスィーまたはズィーという)は、ヒマラヤ山麓を旅するとき、チベット系住民を識別するよい指標となった。

この地域では装身具は単なる衣服の付属品ではなく、それ以上の意味をもっている。装身具の意味を知るには、まずこの地域を知らねばならないだろう。ちなみにネパールは、北海道の約2倍(14万平方キロ)という狭い面積であるにもかかわらず、自然条件、人文条件とも実に多様に富んだ国である。南部はガンジス沖積平野の北端にあたり、標高200メートル前後で、バナナ繁る亜熱帯的景観を呈する一方、北部は世界最高峰のエベレストをはじめとする8000メートル級の高峰が8座もある大ヒマラヤ山脈の氷雪の世界となっている。そこに住む人々も多数の民族からなっており南のインド国境沿いには、地中海型の容貌をし、インド、アーリア系の言語を話す住民がおり、北にはシェルパをはじめとするモンゴロイド型の容貌をし、チベット・ビルマ語系の言語を話す住民がいる。そしてその中間にあるマハバールタ山脈やシワリーク山脈の地域(ネパール語でパハールという)は、南のインド文明(ヒンドラ文明ともいえる)と北のチベット文明、西のイスラム文明という三大文明